

# 水辺好きが名古屋の個性を際立たせる

～ ”水辺とまちの入口研究所” の事例より～

井村 美里

水辺とまちの入口ACT株式会社 代表取締役

## はじめに

今夏のパリオリンピック2024ではセーヌ川が注目を集めた。セーヌ川はパリの繁栄に欠かせない交通路であり、河岸にはパリの歴史と文化を語る建物が並び、世界遺産に指定されている。開会式で各国代表選手団を乗せた水上パレードが行く際は、パリらしい風景や水上ステージ、オブジェ、橋の上の観客席などセーヌ川を最大限に活かした様子が世界に発信され、水辺の可能性の広がりにも心が躍った。華やかな式典の一方で、トライアスロンなどの競技会場にもなった川の水質も話題となった。雨が降れば汚水が流入して水質が悪化するという

事実に驚きを持った方も多いことだろう。水に関心を持つ者にとって、パリオリンピックの話題は、水辺に繁栄した都市の明暗が深く詰まっていたと感じさせるものだった。

都市の発展を支えてきた水辺だが、交通インフラの変化や水質悪化等で世間から目を向けられなくなった歴史もあり、水辺を都市の魅力として捉え直し再生できた都市と、そう至っていない都市がある。名古屋は後者であり、河川や運河といった水辺を都市の魅力としてとらえる市民は多くはいない。水辺を活用するキーパーソンが存在やネットワーク化が水辺を活かしたまちづくりにおいて重要な要素であることは既往研究からも明らか<sup>1</sup>である。

水辺に関心を持つ人材が見出され、水辺に動きが生まれることで、名古屋のまちの新たな魅力のひとつとして水辺が再評価されることを期待して、取り組む事例について紹介する。本稿では、「水辺」を川、運河、池などの水上及び水際、そこにつながるまちの縁をまとめた空間を指すものとする。

## 名古屋の水辺

名古屋の都心部は、名古屋駅地区と栄地区という2つの繁華街が東西方向に並んでいる。東京から名古屋間で計画されているリニア中央新幹線の開業に向け、名古屋駅周辺はリニア駅工事や周辺の再開発計画がすすみ、大きく変貌しつつあり<sup>2</sup>、栄地区は、久屋大通公園の再生をはじめ民間再開

### いむら みさと

名古屋工業大学大学院工学研究科修了、修士（産業戦略）。専門分野は、建築、都市計画、まちづくり。1992年 名古屋市役所入庁、2017年水辺とまちの入口研究所共同代表。2022年名古屋市役所を退職し、特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ入所（外部研究員）。2023年水辺とまちの入口ACT株式会社を設立し、代表取締役に就任。名古屋工業大学コミュニティ創成教育研究センター研究員を兼任。

著書に『中部の都市を探る その軌跡と明日へのまなざし』（中部都市学会編、2015年）、『なんだろう？なるほど！が楽しいまちあるき・納屋橋編』（共著、風媒社）、『名古屋の朝、人生を変える1時間。講演者が語る、幸せのレシピ。朝活ネットワーク名古屋～ここに来れば、何かがある～』（共著、朝活ネットワーク名古屋、2023年）、『身近なオアシス。明日、水辺で会いましょう。』（共著、出版社リボンパブリッシング）など。

発で新しい商業施設のオープンが続く<sup>3</sup>。駅や公園など公共施設整備や民間施設の再開発が主となる東西方向の動きとは趣を変え、交錯する南北方向の動きがある。名古屋城から熱田神宮のある熱田地域を結ぶ堀川や江戸時代のメインストリートであった本町通を主軸とする動きだ。名古屋のまちは、1610年、徳川家康による名古屋城築城から発展がはじまるが、堀川の開削や城下町の格子状道路網など都市の主要な骨格はこの時に造られた。名古屋市観光戦略<sup>4</sup>においては「名古屋城を核として、江戸時代に形成された尾張なごやの歴史的な骨格として歴史・文化魅力軸」と位置付けている。まちの深みを与える南北軸の動きを作ることで、名古屋大都市圏の中核都市にふさわしい、高い国際競争力と魅力を発揮するまちの形成が目指されているが、変化しつつある名古屋都心部の東西方向の軸に対し、南北方向の動きは歩みが緩い。特に、河川や運河といった水辺を都市の魅力としてとらえる市民は多くはいない。名古屋のまちに対して連想できるものをたずねたアンケート<sup>5</sup>では、「百貨店・ショッピングモール」、「城・城下町」と答える回答が30%を超える一方で、選択肢20項目の中で「水辺・河川」は最も低い2.9%にとどまっている。

水辺のまちの印象が薄い名古屋だが、まちの発展を語るに欠かせない水辺がある。上述の堀川、110年前に市街地の排水と新たな水運のため開削された新堀川、90年前に工業都市としての発展をめざし造られた中川運河、いずれも名古屋の人々の暮らしと経済を支える物流運河の役割を担ってきた。特に堀川は、名古屋城築城当時から、尾張徳川領であった木曽地域から木曽川を經由して流送される木材をはじめ、舟運を利用して名古屋城下の人々に必要な食料や物資が運ばれ、沿川には運ばれた物資の倉庫や物資に関わる産業が発展、人々の暮らしを支えた。豊かな木材は、家具や仏具の製造を盛んにし、時計やからくり人形をつくる技術へと進化する。明治時代に入ると鉄道車両の製造など、幅広い分野で使われるようになり、今日のものづくりに強い土地柄へ発展させるのに、非常に大きな役割を果たした。しかし、舟運がなく

なり、水質悪化がすすみ、人々は川に背を向け、水辺はまちの暗部になっていく。昭和30、40年代の日本の多くのまちで起きていたことだ。高度経済成長によって工業化や都市化が進み、大気汚染、水質汚濁、自然破壊の問題に対応するために公害対策基本法などの環境法が整備された昭和40年代中頃になって、人々が環境問題に関心を持ち始める<sup>6</sup>。名古屋の水辺を代表する堀川も、1966年(昭和41年)頃が水質悪化のピークだった。1988年にマイタウン・マイリバー整備計画が認定され本格的に河川整備がはじまり、ヘドロ浚渫や庄内川からの試験導水、浅層地下水の汲み上げ放流などにより水質を改善していく<sup>7</sup>。近年は護岸や遊歩道、親水広場の整備も徐々に進み、堀川に関する水質浄化や歴史、まつり等をテーマとする市民団体が立ち上がり、水質が向上しつつある。

## 都市の水辺に関心を取り戻す活動

水辺に関心を持つ人材が見出され、水辺の動きが生まれることで、名古屋のまちの新たな魅力として水辺が再評価されることを期待して、水辺とまちの入口研究所(以下「水まち研」という。)、ナゴヤSUP推進協議会(以下「ナゴSUP」という。)という2つの取組みを始めた。「水まち研」は、水辺のこと、まちのことをもっと知りたい、楽しみたい、つながりたい、そんな想いをあと一歩進めるための知的探求の場で、2017年12月に設立した。もう一つの「ナゴSUP」は、SUPを楽しむ仲間を増やし、名古屋地域の水域利用の可能性を追求、促進することを目的に、2017年3月に設立した。SUP(Stand up paddle boardの略でサップと呼ぶ。)とは、ボードに乗って水上に立ち、パドルで漕いで進むものである。「水まち研」の活動は、対象と課題を定めて知りたいことを明らかにする一方で、「ナゴSUP」の活動は、未開拓の水上の可能性にチャレンジする。二つの活動に関わる人たちの動向や変化に注目して、その取り組みを紹介する。

「水まち研」では、2018年に参加者を募り、「堀川デザインコード研究会<sup>8</sup>」を実施した。堀川らしい

図表1 ナゴヤSUP推進協議会の活動記録(2017-2023)

時期	活動回数	堀川でのSUP活動	主なトピック
2017年	14回	6回	初めて堀川に入る 大阪シティ SUPを視察 横浜水辺荘チームが遠征にくる
2018年	記録なし	記録なし	堀川・北清水親水広場でごみひろいSUPをはじめる はじめてさんいっしやいSUPをはじめる
2019年	32回	17回	半田運河水上イベントをSUPで補助する 中川運河に初めて入る(中京テレビイベントコラボ) 横浜・大岡川にSUP視察 堀川でハロウィン仮装SUP 中川運河でサンタSUP
2020年	24回	7回	新堀川に初めて入る 木曽三川や豊川など活動エリアが広がる 車椅子でのSUP体験実施 (南知多ユニバーサルビーチプロジェクトとコラボ)
2021年	51回	16回	堀川でレインボープライドパレードに参加 矢作川・枝下用水でのおそうじSUPをはじめる 広島SUP視察 ナゴSUP関東支部の発足 いい川いい川づくりとコラボ企画
2022年	52回	22回	福岡&北九州&大阪SUP視察 東京&横浜SUP視察 堀川WMFイベントでSUP隊スタッフ参加 名古屋都市センターでSUP企画 ナゴSUP関東支部企画始まる 中川運河SUP大行進イベントをはじめる
2023年	52回	24回	五条川SUP体験会で指導協力 蟹江町SUP体験会で指導協力 堀川一斉清掃にSUPで参加 キャンプ&SUP企画の実施 土木学会誌の表紙を飾る 名古屋市環境局おそうじSUPに協力

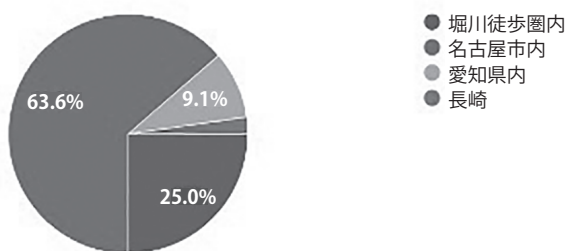
風景を作り出す要素を堀川デザインコードと呼び、参加者が堀川らしいと感じられるパーツを集めた。例えば、川沿いの緑、護岸の石積みの材質や形、建物越しに見る川面、護岸上の係留環など。川の風景として見ていたものの中に、実は堀川らしさが積み重なっていたのだと分かった。その後、研究会で集めた堀川らしい風景のパーツは、急浮上した護岸整備の話に対し、どう活用するべきかという課題に直面した。まちなかを歩く際にチラリと見えていた水面は、新しい護岸によって視界を遮られる。舟運

が盛んな頃に船の係留に多用され摩耗した護岸上に残る係留環は存置か、新設か、記録保存なのか。2019年3月、4月に「描いてみよう! 堀川らしさの魅せ方ワークショップ<sup>9</sup>」を開催した。面白そうといって集まった参加者が模造紙にアイデアを描く。単なる思いつきの意見にならぬよう護岸整備の方針を行政から説明を受け作業した。係留環は徹底的に使うことでその意味を伝えようといった意見、現在より高くなる護岸をテーブルとして使い川を眺めて座れるようにしようという意見など、堀川の

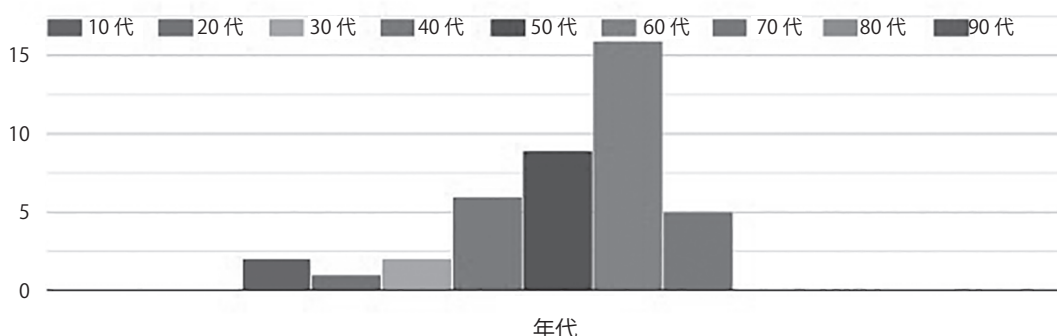
図表2 堀川検定受験者へのアンケート

お住まい（省略可）

44 件の回答



年代（省略可）



価値を再考し、新たな堀川らしさを創り出していこうとするアイデアで模造紙が一杯になった。2020年には、これらの成果を活かして「堀川好きが考える堀川魅せルール研究会<sup>10</sup>」に取り組んだ。全国の都市河川で水辺に親しい景観がなくなりつつあるが、堀川には名古屋の発展を支えてきたことの痕跡など人の手が加えられたゆえの水辺の特徴や面白さがまだある。堀川に残るその良さを少しでも大切にしたいと、沿川の土地利用、建築ルール、川から見た景観へのアイデア、それぞれに統一感を持たせるべく、堀川の景観の議論を行い、行政計画では作成し難い、あえて水辺好きの主観に偏った、「堀川好きがおすすめしたい ここから見るという堀川」をまとめた。

設立から3年間の水辺の探索や学びの活動の積み重ねを活かして、もっと裾野を広く堀川の魅力を伝えたいと、2021年に水辺の「謎解き」を楽しむ「堀川検定<sup>11</sup>」を創設した。堀川が育んできたまち、人、歴史など幅広い分野から問うかなり難し

い検定だ。初級、中級、上級編の試験があり、上級編合格者には、堀川の魅力を広める役“アンバサダー”を任命する。上級になるほど問題はマニアック、つまり、興味ない人は全く関心ないが、より深く、共感できる人にとっては楽しい問題になる。例えば、「堀川の古い写真を解説し、現在の同じ場所に行って写真を撮る」という問題では、写真を拡大し、そこに写る看板や橋の形、撮影当時の地図などを見て現地を見定め解答する。普段何気なく見ているまちの看板や橋の形が気になりだし、解けないとモヤモヤする、そんな問題が目の前に突き出される。川の検定を名乗っているが、川のことだけ知っていれば解けるものではなく、名古屋のまちの歴史、人物、地理、産業、文化、生物、環境など幅広い分野から出題されるため、本当の名古屋のことを知りたいならば堀川を極めましょう、とPRしている。謎解きのようにワクワクと楽しみながら、我がまち名古屋・堀川の「知りたい。気になる!」を深め、知的好奇心を刺激しながら、関心を得ることを目指して



いる。

もう1つの活動「ナゴSUP」は、2017年に6人のメンバーで始まった。名古屋近郊の水辺でSUPを行い、友人に声かけし仲間を広げる活動を繰り返した。スポーツとしてのSUPよりも、水上移動ツールとしてのSUPの可能性に関心を持つメンバーが核となっていたため、ぶらりとまち歩きするようにまちなかの水上に浮かぶ。「水まち研」で興味を深めていた堀川に立つことを目標にしていたが、水質への不安からためらうメンバーもいた。初めて堀川に入ったのは2017年7月である。安全講習など万全の体制を取って開催した。その後は、全長16kmある堀川でエントリー可能な場所探しを兼ねて上流から下流まで幾度か水上を往来している。2018年に「はじめてさん、いらっしやいSUP会」を開催して友人の枠を超えた仲間を増やす活動をはじめたが、海やきれいな川での体験がメインで、初めての人を堀川に案内することは殆どなかった。都市河川でのSUPは、水域の規制やルール、舟運事業者など他の水域利用者との関係、水質への抵抗感などの課題がある。大阪、横浜、広島など先進的に都市河川でSUP活動をする団体を視察に行き、活動の参考にした。繰り返し堀川に浮かんでいると視野が広がり、流れてくるゴミが気になって堀川の水上ごみひろいをはじめた。現在は月に2回、定例で行っている堀川でのごみひろいSUPは、2018年に北清水親水広場、2023年に宮の渡し公園から始めている。共にSUPを楽しむ仲間が増えると、そのネットワークから様々な視点での活動につながる。車椅子でのビッグSUP体験会や、堀川でLGBTQレインボーパレードなど展開が広がっていく。イベントへの協力依頼が届くようになり、手続き的に難しかった水域での活動ができたり、水上に立つシーンを多くの人に見てもらう機会が増えている。

## 名古屋の水辺は変わるのか

「水まち研」では、2024年12月に第4回目の堀川検定中級編試験を実施するが、これまでの検定では、県外からの受験者の存在や、堀川沿川で

はない市民の受験が最も多い比率になっている。従前の堀川でのイベントや市民活動は70代以降の参加者が多かったが、堀川検定では10代から70代までの幅広い層が受験し、最も多いのは50～60代となっている。第3回までの検定で10名のアンバサダーを輩出し、暗渠好きの10代の高校生から、長く堀川で環境活動をしてきた70代まで、これまで出会うことがなかった深層的な堀川ファンが表出した。アンバサダーは翌年以降の検定問題を作成し、検定前に実施する学びの講座で活躍する。生き物観察に関心が高いアンバサダーは「堀川にやってくるいきものさがし」講座で講師になり、カツ井マニアでもあるアンバサダーは、「堀川でカツ井を食べる」と題し、堀川検定の過去問題と堀川沿いのカツ井店を解説する講座を行っている。堀川を細分化してより狭い範囲を深めるテーマ設定だが、逆に、堀川には興味がないが、生き物やカツ井に興味を持つ人が参加する結果につながっている。

「ナゴSUP」は、出入り自由でゆるやかなサークル形式のグループだ。2017年の立上げ時6名だったメンバーは52名まで増えた。イベントを企画すると会員の友人も含め、さらに多くの参加者が集まる。メンバーが増えネットワークが広がると、メンバーの所属する団体や関心事から、毎年のように新しい活動がはじまっている。2024年は初めて、小学校プールを使った子ども向けSUP体験会を実施した。他団体との協力機会が増え、活動の幅が広がっている。当初は、堀川の水上にSUPで浮かんでいると、陸から「落ちたら大変だぞ」といった驚きとややネガティブな印象を込めた声が届いたが、最近は「気持ちよさそうだね」といった肯定的な声に変わり始めている。定例で行う堀川のSUPごみひろいには、新しいアクティビティであるSUPへの関心も重なり、メンバー以外の参加が増えている。

## おわりに

「水まち研」では、水辺の探求や堀川検定をすすめ、堀川への関心が深いアンバサダーが育ち、多様な視点で堀川を捉えた新たな活動につながってい

る。「ナゴSUP」では堀川や中川運河でSUPする機会やそれを見る人が着実に増え、水上に人がいても当然と受け入れられるようになりつつある。人々が見落としがちな水辺のディテールを探求したり、入るのをためらうような都市河川にも嬉々として浮かび、楽しみながら活動する人材が表出し、ワクワクを共有する仲間がつながり、新しい動きが展開する。一部のマニア的な関心が伝達力を持ち、まちの魅力が伝わりはじめている。

名古屋のまちの新たな魅力として水辺が再認識されることを期待して取り組む2つの活動は、まだ継続途中だが、着実に人々の水辺への抵抗を低くして、関心の裾野を広げている。まちへの関心は、地域の文化や歴史に対する理解を深め次世代への継承につながり、地域のつながりが深まり活性化することで協力やコラボが生まれやすくなる、といった効果が期待できる。小さな水辺の動きが、名古屋の個性のひとつに「水辺」を加え、選ばれるまちになることを期待している。■

#### 《注》

- 1 「全国アンケートからみた「かわまちづくり」の現状と課題報告 第31号」リバーフロント研究所（2020年9月）
- 2 「名古屋駅周辺まちづくり構想」名古屋市（2014年9月）

月）

- 3 「栄地区グランドビジョン—さかえ魅力向上方針—」名古屋市（2013年6月）
- 4 「名古屋市観光戦略」名古屋市（2019年3月）
- 5 「名古屋市の観光に関するアンケート調査」名古屋市観光文化交流局（2021年12月）
- 6 「環境問題の歴史」独立行政法人環境再生保全機構ウェブサイト  
<https://www.erca.go.jp/yobou/taiki/rekishi/08.html>
- 7 「一級河川庄内川水系堀川圏域河川整備計画」名古屋市（2010年10月）
- 8 「かわ・まち・川縁から見つける堀川らしい風景 HORIKAWA」水辺とまちの入口研究所・堀川デザインコード研究会（2018年6月）
- 9 「描いてみよう！堀川らしさの魅せ方ワークショップ」水辺とまちの入口研究所（2019年4月）
- 10 「堀川好きがおすすめしたい ここから見るといい堀川」水辺とまちの入口研究所・堀川好きが考える堀川魅せルール研究会（2021年3月）
- 11 「～名古屋の母なる川を知っているか～めざせ！堀川アンバサダー 堀川検定」水辺とまちの入口研究所  
<https://horikawakentei.net/>

#### 《参考文献等》

- 伊藤正博・沢井鈴一（2014年6月）『堀川 歴史と文化の探索』株式会社あるむ
- 井村美里・秀島栄三（2020年4月）『知的探求心をくすぐりたい—水辺とまちの入口研究所—』「土木学会誌 2020年4月号 特集：水辺の国土史—豊かな暮らしを創るエンジニアリング」土木学会

